

第 6 章

固有値問題入門-2 次元の場合

6.1 線型変換と座標変換

6.1.1 座標変換

1.7 節で説明した座標変換について $n = 2$ の場合に説明します。以下では 2 次元部分空間 V は $V = \mathbf{R}^2$ となります。また 1.7 節における V 中の平行でない 2 本のベクトルとして標準単位ベクトル

$$\vec{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \vec{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

を取ります。このとき \vec{e}_1, \vec{e}_2 が定める座標は標準的な

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2$$

となります。次に平行でない

$$\vec{p} = \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \end{pmatrix}, \vec{q} = \begin{pmatrix} q_1 \\ q_2 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^2$$

を取ります。このとき $\vec{p} \nparallel \vec{q}$ であることから

$$\Delta := |\vec{p} \vec{q}| = p_1q_2 - p_2q_1 \neq 0$$

が成立します。 \vec{p} と \vec{q} を用いて座標変換するために

$$P = (\vec{p} \vec{q})$$

と定めて、

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \xi \vec{p} + \eta \vec{q} = P \begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$$

と \vec{p} , \vec{q} を用いる座標が定義できます。

6.1.2 線型変換

2次正方行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in M_2(\mathbf{R})$ を用いて

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax + by \\ cx + dy \end{pmatrix}$$

を考えます。この対応によって写像

$$T_A: \mathbf{R}^2 \rightarrow \mathbf{R}^2$$

が定まりますが、これを A が定める線型変換と呼びます。この T_A を $\begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$ 座標で表現することを考えます。

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} \xi' \\ \eta' \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$$

と対応しますから

$$\begin{pmatrix} \xi' \\ \eta' \end{pmatrix} = P^{-1} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = P^{-1} A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = P^{-1} A P \begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$$

と $\begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$ 座標では $P^{-1}AP$ が定める線型変換 $T_{P^{-1}AP}$ となります。

変換 ここで出てくる線型変換の変換についてです。 X を集合とするとき X から X への写像

$$f: X \rightarrow X$$

のことを X 上の変換と呼びます。上で T_A を定義するとき用いた x' と y' ですが、 x と y が定める同じ座標系を用いていることを示すためにダッシュ「'」を使っています。

6.2 行列の対角化

6.2.1 固有多項式

以下では $A \in M_2(\mathbf{R})$ が定める線型変換を座標変換を行って、簡単な形、特に対角行列が定める線型変換にすることを考えます。まず具体的な例として

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 4 & 3 \end{pmatrix}$$

について考えます。

平行でない2本のベクトル $\vec{p}, \vec{q} \in \mathbf{R}^2$ を用いた正則行列 $P = (\vec{p} \ \vec{q})$ によって

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

とすることを考えます。このとき $AP = P \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$ が従いますが、 P の列ベクトルを用いると

$$(A\vec{p} \ A\vec{q}) = (\alpha\vec{p} \ \beta\vec{q})$$

となります。各列を見ると

$$A\vec{p} = \alpha\vec{p}, \quad A\vec{q} = \beta\vec{q}$$

すなわち

$$(\alpha I_2 - A)\vec{p} = (\beta I_2 - A)\vec{q} = \vec{0}$$

であることが分かります。他方 $\vec{p} \neq \vec{0}$ かつ $\vec{q} \neq \vec{0}$ が成立します。ここで次の定理 6.1 を用いると

$$\det(\alpha I_2 - A) = \det(\beta I_2 - A) = 0 \tag{6.1}$$

が従います。

定理 6.1. $B \in M_2(\mathbf{R})$ に対して次の (6.2) と (6.3) は同値です。

$$B\vec{p} = \vec{0}, \quad \vec{p} \neq \vec{0} \text{ を満たす } \vec{p} \in \mathbf{R}^2 \text{ が存在する.} \tag{6.2}$$

$$\det B = 0 \tag{6.3}$$

ここで

$$\begin{aligned}\Phi_A(\lambda) &:= \det(\lambda I_2 - A) \\ &= \begin{vmatrix} \lambda - 1 & -2 \\ -4 & \lambda - 3 \end{vmatrix} \\ &= (\lambda - 1)(\lambda - 3) - (-2)(-3) \\ &= \lambda^2 - 4\lambda - 5 = (\lambda - 5)(\lambda + 1)\end{aligned}$$

を定義すると (6.1) から α と β は $\Phi_A(\lambda)$ の根であることが分かります。

ここで $\Phi_A(\lambda)$ を一般的に定義します。

定義 6.1. $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in M_2(\mathbf{R})$ に対して

$$\begin{aligned}\Phi_A(\lambda) &:= \det(\lambda I_2 - A) = \begin{vmatrix} \lambda - a & -b \\ -c & \lambda - d \end{vmatrix} \\ &= (\lambda - a)(\lambda - d) - (-b)(-c) \\ &= \lambda^2 - (a + d)\lambda + ad - bc \\ &= \lambda^2 - (a + d)\lambda + \det(A)\end{aligned}$$

を A の固有多項式と呼びます。

さらに A に関する具体的な考察を行います。 (6.1) から

$$\Phi_A(\alpha) = \Phi_A(\beta) = 0$$

であることは分かりましたが、 $\Phi_A(\lambda)$ の根 $\lambda = 1, 5$ との関係は分かりません。

実は、固有多項式は線型座標変換を行っても変わりません。すなわち、一般に $A \in M_2(\mathbf{R})$ と正則な $P \in M_2(\mathbf{R})$ に対して

$$\Phi_A(\lambda) = \Phi_{P^{-1}AP}(\lambda) \tag{6.4}$$

が成立します。実際、

$$\begin{aligned}\det(\lambda I_2 - P^{-1}AP) &= \det(P^{-1}\lambda I_2P - P^{-1}AP) = \det(P^{-1}(\lambda I_2 - A)P) \\ &= \det(P^{-1}) \det(\lambda I_2 - A) \det(P) \\ &= \det(\lambda I_2 - A)\end{aligned}$$

から導けます。ここで $\det(P^{-1}) \det(P) = \det(P^{-1}P) = \det(I_2) = 1$ であることを用いました。

公式 (6.4) を応用しましょう。 $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$ ですから

$$\Phi_A(\lambda) = \Phi_{P^{-1}AP}(\lambda) = \begin{vmatrix} \lambda - \alpha & 0 \\ 0 & \lambda - \beta \end{vmatrix} = (\lambda - \alpha)(\lambda - \beta)$$

から

$$(\lambda - 5)(\lambda + 1) = (\lambda - \alpha)(\lambda - \beta)$$

が分かります。このことから

$$\alpha = 5, \beta = -1 \quad \text{または} \quad \alpha = -1, \beta = 5$$

であることが従います。

6.2.1 節を締めくくるために、公式 (6.4) を定理 6.2 にまとめます。

定理 6.2. 2次正方行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ と正則な $P \in M_2(\mathbf{R})$ に対して

$$\Phi_A(\lambda) = \Phi_{P^{-1}AP}(\lambda) \tag{6.5}$$

が成立します。

6.2.2 固有値と固有ベクトル

以下では $\alpha = 5, \beta = -1$ の場合を考えます。まず

$$(5I_2 - A)\vec{p} = \vec{0}$$

を用いて \vec{p} を求めます。

$$\begin{aligned} (5I_2 - A) \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} &\Leftrightarrow \begin{pmatrix} 4 & -2 \\ -4 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \\ &\Leftrightarrow 2x - y = 0 \end{aligned}$$

から

$$\vec{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ 2x \end{pmatrix} = x \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

となります。

同様に

$$(-I_2 - A)\vec{q} = \vec{0}$$

を用いて \vec{q} を求めましょう.

$$\begin{aligned} (-I_2 - A) \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} &\Leftrightarrow \begin{pmatrix} -2 & -2 \\ -4 & -4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \\ &\Leftrightarrow x + y = 0 \end{aligned}$$

から

$$\vec{q} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ -x \end{pmatrix} = x \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix}$$

となります.

ここで \vec{p} と \vec{q} においてそれぞれ $x = 1$ の場合を考えます*1. すなわち

$$\vec{p} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad \vec{q} = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix}, \quad P = (\vec{p} \ \vec{q}) = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 2 & -1 \end{pmatrix}$$

と定めると

$$\det(P) = -3 \neq 0$$

から $\vec{p} \nparallel \vec{q}$ 従って P が正則であることが分かります*2. さらに

$$A\vec{p} = 5\vec{p}, \quad A\vec{q} = -\vec{q}$$

から

$$\begin{aligned} AP &= (A\vec{p} \ A\vec{q}) = (5\vec{p} \ -\vec{q}) \\ &= (\vec{p} \ \vec{q}) \begin{pmatrix} 5 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} 5 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

が従います. そして P が正則ですから

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 5 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$

となります.

以上で $P = (\vec{p} \ \vec{q}) = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 2 & -1 \end{pmatrix}$ が定める線型座標変換

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$$

*1 $x \neq 0$ であれば何でもいことが分かります.

*2 実是一般論があつて $\det(P)$ を調べなくても, この状況で P が正則となることが分かります. 167 ページの定理 6.3 で説明します.

によって線型変換

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 4 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

は

$$\begin{pmatrix} \xi' \\ \eta' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 5 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 5\xi \\ -\eta \end{pmatrix}$$

と表現されることが示されました。

この6.2.2節を締めくくるのにあたって、 $\alpha, \beta, \vec{p}, \vec{q}$ に対応する定義を行います。

定義 6.2. $A \in M_2(\mathbf{R})$ と $\alpha \in \mathbf{R}$ に対して

$$A\vec{v} = \alpha\vec{v}, \vec{v} \neq \vec{0}$$

を満たす $\vec{v} \in \mathbf{R}^2$ が存在するとき α を A の固有値と呼びます。また、このとき \vec{v} を α に対する固有ベクトルと呼びます。

定理 6.1 によると $\alpha \in \mathbf{R}$ が A の固有値であることと

$$\Phi_A(\alpha) = 0$$

であることと必要十分であることが分かります。それは

$$A\vec{v} = \alpha\vec{v} \Leftrightarrow (\alpha I_2 - A)\vec{v} = \vec{0}$$

を確認して定理 6.1 において $B = \alpha I_2 - A$ とすればすぐに分かります。

固有方程式が表す方程式

$$\Phi_A(\lambda) = 0$$

を固有方程式と呼びますが、固有値は固有方程式の根とも言い換えることができます。

6.2.3 対角化可能な行列—十分条件

これまで行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して正則な $P \in M_2(\mathbf{R})$ を求めて

$$P^{-1}AP$$

を対角行列とすることを考えてきました。様々な定義を与えながら説明してきましたが、もう一度別の例で計算してみましょう。

$$A = \begin{pmatrix} -1 & -6 \\ 4 & 9 \end{pmatrix}$$

について考えます. この固有方程式は

$$\Phi_A(\lambda) = \begin{vmatrix} \lambda+1 & 6 \\ -4 & \lambda-9 \end{vmatrix} = \lambda^2 - 8\lambda + 15 = (\lambda-3)(\lambda-5)$$

より A の固有値は $\lambda = 3, 5$ であることが分かります. 次にそれぞれの場合について固有ベクトルを求めましょう.

(i) $\lambda = 3$ のとき

$$\begin{aligned} A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = 3 \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} &\Leftrightarrow (3I_2 - A) \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \\ &\Leftrightarrow \begin{pmatrix} 4 & 6 \\ -4 & -6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \\ &\Leftrightarrow 2x + 3y = 0 \end{aligned}$$

から固有ベクトルは

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ -\frac{2}{3}x \end{pmatrix} = \frac{x}{3} \begin{pmatrix} 3 \\ -2 \end{pmatrix} \quad (x \neq 0)$$

であることが分かります.

(ii) $\lambda = 5$ のとき

$$\begin{aligned} A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = 5 \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} &\Leftrightarrow (5I_2 - A) \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \\ &\Leftrightarrow \begin{pmatrix} 6 & 6 \\ -4 & -4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \\ &\Leftrightarrow x + y = 0 \end{aligned}$$

から固有ベクトルは

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ -x \end{pmatrix} = x \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} \quad (x \neq 0)$$

であることが分かります.

ここで

$$\vec{p} = \begin{pmatrix} 3 \\ -2 \end{pmatrix}, \quad \vec{q} = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix}, \quad P = (\vec{p} \ \vec{q}) = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ -2 & -1 \end{pmatrix}$$

と定めます. このとき P は次の定理 6.3 によって正則となります. 従って

$$A(\vec{p} \ \vec{q}) = (3\vec{p} \ 5\vec{q}) = (\vec{p} \ \vec{q}) \begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 5 \end{pmatrix}$$

から

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 5 \end{pmatrix}$$

となります。

定理 6.3. $A \in M_2(\mathbf{R})$ とします。相異なる $\alpha, \beta \in \mathbf{R}$ に対して $\vec{p}, \vec{q} \in \mathbf{R}^2$ が

$$A\vec{p} = \alpha\vec{p}, \quad A\vec{q} = \beta\vec{q}$$

$$\vec{p} \neq \vec{0}, \quad \vec{q} \neq \vec{0}$$

を満たすとします。このとき 2 次正方行列 $P = (\vec{p} \ \vec{q})$ は正則です。

この定理 6.3 を証明しましょう。 P が正則であることと

$$P \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = x\vec{p} + y\vec{q} = \vec{0} \Rightarrow x = y = 0$$

であることと必要十分条件ですから

$$x\vec{p} + y\vec{q} = \vec{0}$$

を仮定します。この両辺に $(\beta I_2 - A)$ を掛けると

$$(\beta I_2 - A)\vec{p} = ((\beta - \alpha)I_2 + (\alpha I_2 - A))\vec{p} = (\beta - \alpha)\vec{p}, \quad (\beta I_2 - A)\vec{q} = \vec{0}$$

から

$$x(\beta - \alpha)\vec{p} = \vec{0}$$

となります。 $\beta - \alpha \neq 0$ から

$$x\vec{p} = \vec{0}$$

を得ますが、次の演習 6.1 から $x = 0$ となります。そして

$$y\vec{q} = \vec{0}$$

を得ますが、同様に $\vec{q} \neq \vec{0}$ から $y = 0$ を得ます。以上で $P = (\vec{p} \ \vec{q})$ が正則であることが証明されました。

演習 6.1. $\vec{v} \in \mathbf{R}^n$ が $\vec{v} \neq \vec{0}$ を満たすとします。このとき、 $x\vec{v} = \vec{0}$ ならば $x = 0$ が従うことを示しましょう。

ある正則行列 P に対して $P^{-1}AP$ が対角行列になるとき $A \in M_2(\mathbf{R})$ は対角化可能であると定義します. 上の定理 6.3 を用いると A の固有多項式が相異なる 2 実根を持つとき A は対角化可能であることが分かります.

定理 6.4. $A \in M_2(\mathbf{R})$ の固有多項式

$$\Phi_A(\lambda) = (\lambda - \alpha)(\lambda - \beta)$$

が相異なる 2 実根 α, β を持つとき, A は対角化可能となります.

定理 6.4 を証明しましょう. $\Phi_A(\alpha) = \Phi_A(\beta) = 0$ であることから

$$A\vec{p} = \alpha\vec{p}, \quad \vec{p} \neq \vec{0}$$

$$A\vec{q} = \beta\vec{q}, \quad \vec{q} \neq \vec{0}$$

を満たす $\vec{p}, \vec{q} \in \mathbf{R}^2$ が存在します. ここで定理 6.3 を用いると $P = (\vec{p} \ \vec{q})$ は正則となります. さらに

$$AP = A(\vec{p} \ \vec{q}) = (A\vec{p} \ A\vec{q}) = (\alpha\vec{p} \ \beta\vec{q}) = (\vec{p} \ \vec{q}) \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

から

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

であることが分かります.

演習 6.2. 以下の行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ を対角化しましょう.

$$(1) \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & -4 \end{pmatrix} \quad (2) \begin{pmatrix} -4 & -2 \\ 3 & 1 \end{pmatrix} \quad (3) \begin{pmatrix} 1 & 12 \\ 3 & 1 \end{pmatrix}$$

6.2.4 固有多項式が重根を持つ場合

$A \in M_2(\mathbf{R})$ の固有多項式が重根を持つと仮定します. すなわち $\alpha \in \mathbf{R}$ に対して

$$\phi_A(\lambda) = (\lambda - \alpha)^2$$

が成立すると仮定します. さらに A が対角化可能であるとします. すなわち正則な $P \in M_2(\mathbf{R})$ が存在して $P^{-1}AP$ が対角行列になるとします. このとき

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \gamma_1 & 0 \\ 0 & \gamma_2 \end{pmatrix}$$

とすると定理 6.2 から

$$(\lambda - \alpha)^2 = \Phi_A(\lambda) = \Phi_{P^{-1}AP}(\lambda) = (\lambda - \gamma_1)(\lambda - \gamma_2)$$

が従いますから

$$\gamma_1 = \gamma_2 = \alpha$$

であることが分かります。よって

$$P^{-1}AP = \alpha I_2$$

となりますが、この両辺に左から P を右から P^{-1} を掛けると

$$A = P \cdot \alpha I_2 \cdot P^{-1} = \alpha I_2$$

であることが導かれます。以上から次の定理 6.5 を証明しました。

定理 6.5. $A \in M_2(\mathbf{R})$ の固有多項式が

$$\Phi_A(\lambda) = (\lambda - \alpha)^2$$

と重根 $\alpha \in \mathbf{R}$ を持つとします。このとき A が対角化可能ならば $A = \alpha I_2$ となります。

例えば $A = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 1 & \alpha \end{pmatrix}$ は

$$\Phi_A(\lambda) = \begin{vmatrix} \lambda - \alpha & 0 \\ -1 & \lambda - \alpha \end{vmatrix} = (\lambda - \alpha)^2$$

ですが、この定理 6.5 から対角化できないことが分かります。実は、 $A \in M_2(\mathbf{R})$ が

$$\Phi_A(\lambda) = (\lambda - \alpha)^2, A \neq \alpha I_2$$

ならばある正則行列 $P \in M_2(\mathbf{R})$ が存在して

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 1 & \alpha \end{pmatrix}$$

となります (6.3.5 節, 177 ページ)。

6.2.5 行列の累乗

$A \in M_2(\mathbf{R})$ が対角化可能であるとします. すなわち, 正則な P^{-1} が存在して

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

となるとします. このとき A^n を A の固有値を用いて表すことができます.

実際, この式の両辺の n 乗はそれぞれ

$$(P^{-1}AP)^n = P^{-1}A^nP, \quad \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}^n = \begin{pmatrix} \alpha^n & 0 \\ 0 & \beta^n \end{pmatrix}$$

と帰納的に計算できますから

$$P^{-1}A^nP = \begin{pmatrix} \alpha^n & 0 \\ 0 & \beta^n \end{pmatrix}$$

さらに

$$A^n = P \begin{pmatrix} \alpha^n & 0 \\ 0 & \beta^n \end{pmatrix} P^{-1}$$

を示すことができます.

6.3 Cayley-Hamilton の定理

6.3.1 Cayley-Hamilton の定理

この 6.3 節では対角化を用いなくて行列の累乗を計算する方法を学びます.

そのために 2 次正方行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ は恒等的にある等式を満たすことを示します.

$$\begin{aligned} A^2 &= \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a^2 + bc & ab + db \\ ac + dc & bc + d^2 \end{pmatrix} \\ (a+d)A &= \begin{pmatrix} a^2 + ad & ab + db \\ ac + dc & ad + d^2 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} A^2 - (a+d)A &= \begin{pmatrix} a^2+bc & ab+db \\ ac+dc & bc+d^2 \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} a^2+ad & ab+db \\ ac+dc & ad+d^2 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} bc-ad & 0 \\ 0 & bc-ad \end{pmatrix} = -\det(A)I_2 \end{aligned}$$

が成立します。以上から、次の定理 6.6 を示しました。

定理 6.6. (Hamilton-Cayley の定理) 2次正方行列 A に対して

$$A^2 - (a+d)A + \det(A)I_2 = O \tag{6.6}$$

が成立します。

この (6.6) は固有方程式

$$\lambda^2 - (a+d)\lambda + \det(A) = 0$$

に対して、変数 λ を A で、定数項を I_2 で置き換えた形になっていることに注意しましょう。

6.3.2 行列の累乗 (単純固有値の場合)

ここで具体的な例をもとに Hamilton-Cayley の定理をどのように適用すれば A^n を計算できるか考えましょう。

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 4 & 3 \end{pmatrix}$$

とします。このとき Hamilton-Cayley の定理によって

$$A^2 - 4A - 5I_2 = O \tag{6.7}$$

が成立します。固有多項式が

$$\lambda^2 - 4\lambda - 5 = (\lambda - 5)(\lambda + 1)$$

と因数分解できることに着目すると (6.7) は

$$A(A - 5I_2) = (-1)(A - 5I_2) \tag{6.8}$$

$$A(A + I_2) = 5(A + I_2) \tag{6.9}$$

と変形できます。これから

$$A^n(A - 5I_2) = (-1)^n(A - 5I_2) \quad (6.10)$$

$$A^n(A + I_2) = 5^n(A + I_2) \quad (6.11)$$

が成立することが帰納的に証明できます。(6.10)–(6.11) から

$$(-6)A^n = (-1)^n(A - 5I_2) - 5^n(A + I_2)$$

を経て

$$A^n = -\frac{1}{6}\{(-1)^n(A - 5I_2) - 5^n(A + I_2)\}$$

を得ます。

一般に2次正方行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ の固有方程式

$$\lambda^2 - (a + d)\lambda + \det(A) = 0$$

が相異なる2根 α と β を持つと仮定します。

$$\alpha \neq \beta \quad (6.12)$$

このとき固有多項式は

$$\lambda^2 - (a + d)\lambda + \det(A) = (\lambda - \alpha)(\lambda - \beta)$$

と因数分解でき、解と係数の関係から

$$\alpha + \beta = a + d, \quad \det(A) = \alpha\beta$$

も得ます。このことから A に対して Hamilton-Cayley の定理を適用すると

$$A^2 - (\alpha + \beta)A + \alpha\beta I_2 = O$$

が導かれます。これを

$$A(A - \alpha I_2) = \beta(A - \alpha I_2) \quad (6.13)$$

$$A(A - \beta I_2) = \alpha(A - \beta I_2) \quad (6.14)$$

と変形すれば、帰納的に

$$A^n(A - \alpha I_2) = \beta^n(A - \alpha I_2) \quad (6.15)$$

$$A^n(A - \beta I_2) = \alpha^n(A - \beta I_2) \quad (6.16)$$

を得ます。(6.15)–(6.16) から

$$(\beta - \alpha)A^n = (\beta^n - \alpha^n)A + \alpha\beta(\alpha^{n-1} - \beta^{n-1})I_2$$

が従います。仮定 (6.12) から $\beta - \alpha \neq 0$ ですから公式

$$A^n = \frac{\beta^n - \alpha^n}{\beta - \alpha}A + \alpha\beta \frac{\alpha^{n-1} - \beta^{n-1}}{\beta - \alpha}I_2 \quad (6.17)$$

を得ます。この公式 (6.17) を

$$A^n = \frac{\alpha^n}{\beta - \alpha}(\beta I_2 - A) - \frac{\beta^n}{\beta - \alpha}(\alpha I_2 - A) \quad (6.18)$$

と整理すると次の定理 6.7 を示したことになります。

定理 6.7. $A \in M_2(\mathbf{R})$ の固有多項式

$$\Phi_A(\lambda) = (\lambda - \alpha)(\lambda - \beta)$$

が相異なる 2 実根 $\alpha, \beta \in \mathbf{R}$ を持つとします。すなわち $\alpha \neq \beta$ が成立するとします。このとき n によらない 2 次正方行列 $X_0, X_1 \in M_2(\mathbf{R})$ が存在して

$$A^n = \alpha^n X_0 + \beta^n X_1$$

が成立します。

演習 6.3. 以下の行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して, Cayley-Hamilton の定理を用いて A^n を求めましょう。

$$(1) \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & -4 \end{pmatrix} \quad (2) \begin{pmatrix} -4 & -2 \\ 3 & 1 \end{pmatrix} \quad (3) \begin{pmatrix} 1 & 12 \\ 3 & 1 \end{pmatrix}$$

6.3.3 固有値が重根の場合

今度は 2 次正方行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ の固有方程式

$$\lambda^2 - (a + d)\lambda + \det(A) = 0$$

が重根 α を持つとします。このとき固有多項式は

$$\lambda^2 - (a + d)\lambda + \det(A) = (\lambda - \alpha)^2$$

と因数分解でき、解と係数の関係から

$$2\alpha = a + d, \quad \det(A) = \alpha^2$$

も得ます。このことから A に対して Hamilton-Cayley の定理を適用すると

$$A^2 - 2\alpha A + \alpha^2 I_2 = O$$

が導かれます。このとき重根を持たない上の場合と同様に

$$A(A - \alpha I_2) = \alpha(A - \alpha I_2)$$

より

$$A^n(A - \alpha I_2) = \alpha^n(A - \alpha I_2) \quad (6.19)$$

を得ます。これから A^n を求めるには以下のようにします。 $\alpha = 0$ の場合は $A^2 = O$ ですから、 $A^n = O$ ($n \geq 2$) となります。以下 $\alpha \neq 0$ の場合を考えます。 $B = \frac{1}{\alpha}A$ と定めると $B^n = \frac{1}{\alpha^n}A^n$ が成立します。このとき (6.19) の両辺を $\frac{1}{\alpha^{n+1}}$ 倍して

$$B^{n+1} - B^n = B - I$$

が成立することが分かります。階差が一定の $B - I$ となりますから

$$B^n = B + (n-1)(B - I)$$

が分かります。これから

$$A^n = \alpha^{n-1}A + (n-1)\alpha^{n-1}(A - \alpha I_2) = n\alpha^{n-1}A - (n-1)\alpha^n I_2 \quad (6.20)$$

が導けます。

例 6.1. 正方行列

$$A = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 3 \end{pmatrix}$$

の固有多項式は

$$\begin{vmatrix} \lambda - 1 & 1 \\ -1 & \lambda - 3 \end{vmatrix} = (\lambda - 2)^2$$

と計算されます。*Cayley-Hamilton* の定理によると

$$A^2 - 4A + 4I_2 = O_2 \quad \text{すなわち} \quad A(A - 2I_2) = 2(A - 2I_2)$$

となります。ここで $B = \frac{1}{2}A$ と定めると、この式から

$$B^{n+1} - B^n = B - I_2$$

が従いますから

$$B^n = B + (n-1)(B - I) \quad \text{から} \quad A^n = n2^{n-1}A - (n-1)2^n I_2$$

を得ます。

演習 6.4. 以下の $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して *Cayley-Hamilton* の定理を用いて A^n を求めましょう。

$$(1) A = \begin{pmatrix} 7 & 4 \\ -1 & 3 \end{pmatrix} \quad (2) A = \begin{pmatrix} 5 & -1 \\ 9 & -1 \end{pmatrix} \quad (3) A = \begin{pmatrix} 3 & 2 \\ -2 & -1 \end{pmatrix}$$

6.3.4 行列の多項式

固有多項式が重根を持つ実 2 次正方行列 A に対して $A \in M_2(\mathbf{R})$ の n 乗を別の形で計算します。

λ の多項式

$$g(\lambda) = a_k \lambda^k + a_{k-1} \lambda^{k-1} + \cdots + a_1 \lambda + a_0$$

と一般の 2 次正方行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して

$$g(A) = a_k A^k + a_{k-1} A^{k-1} + \cdots + a_1 A + a_0 I_2$$

と定めます。別の多項式

$$f(\lambda) = b_\ell \lambda^\ell + b_{\ell-1} \lambda^{\ell-1} + \cdots + b_1 \lambda + b_0$$

があるとき

$$f(A) + g(A) = (f + g)(A), \quad f(A)g(A) = (fg)(A)$$

が成立します。

2 次正方行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ の固有方程式

$$\lambda^2 - (a + d)\lambda + \det(A) = 0$$

が重根 α を持つとします。このとき固有多項式は

$$\lambda^2 - (a + d)\lambda + \det(A) = (\lambda - \alpha)^2$$

と因数分解です． λ^n を固有多項式 $(\lambda - \alpha)^2$ で割る余りを求めましょう．固有多項式が2次ですから，余りは λ の1次式です．従って

$$\lambda^n = \varphi(\lambda)(\lambda - \alpha)^2 + c\lambda + d \quad (6.21)$$

と定数 c と d を用いて表示できます．この式に $\lambda = \alpha$ を代入して

$$\alpha^n = c\alpha + d$$

を得ます．また (6.21) の両辺を λ で微分して

$$n\lambda^{n-1} = \varphi'(\lambda)(\lambda - \alpha)^2 + 2\varphi(\lambda)(\lambda - \alpha) + c$$

を得ますが，これに $\lambda = \alpha$ を代入して

$$n\alpha^{n-1} = c$$

が従います．以上から $c = n\alpha^{n-1}$ と $d = -n\alpha^n + \alpha^n$ となり

$$\lambda^n = \varphi(\lambda)(\lambda - \alpha)^2 + n\alpha^{n-1}\lambda + n\alpha^n - \alpha^n \quad (6.22)$$

が成立します．これに A を代入すると

$$A^n = n\alpha^{n-1}A - (n\alpha^n - \alpha^n)I_2 = n\alpha^{n-1}A - (n-1)\alpha^n I_2$$

と174ページの(6.20)を示すことができます．

演習 6.5. 以下の $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して上で示した方法を用いて A^n を求めましょう．

$$(1) A = \begin{pmatrix} 7 & 4 \\ -1 & 3 \end{pmatrix} \quad (2) A = \begin{pmatrix} 5 & -1 \\ 9 & -1 \end{pmatrix} \quad (3) A = \begin{pmatrix} 3 & 2 \\ -2 & -1 \end{pmatrix} \quad (4) A = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 3 \end{pmatrix}$$

演習 6.6. ここで示した方法を用いて2次正方行列の固有多項式が重根を持たない場合に A^n を求めてください (173ページの公式(6.17)を示してください)．

演習 6.7. 以下の行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して，演習6.6で示した方法を用いて A^n を求めましょう．

$$(1) \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & -4 \end{pmatrix} \quad (2) \begin{pmatrix} -4 & -2 \\ 3 & 1 \end{pmatrix} \quad (3) \begin{pmatrix} 1 & 12 \\ 3 & 1 \end{pmatrix}$$

6.3.5 固有方程式が重根を持つ場合の標準形-Jordan 標準形

今まで、固有多項式が相異なる実根を持つ場合、2次正方行列が対角化可能であること示しました。2次正方行列 A の固有多項式 $\Phi_A(\lambda)$ が、重根 α を持つ場合で対角化できる場合

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix} = \alpha I_2$$

から

$$A = P\alpha I_2 P^{-1} = \alpha I_2$$

と単位行列 I_2 の固有値倍であることが従います。したがって、単位行列の定数倍である場合を除けば、固有多項式が重根を持つ場合は行列 A は対角化できないことが分かります。しかし、この場合も *Jordan 標準形* と呼ばれる単純な標準形があり、応用上有用です。

例 6.1 で考えた 2 次正方行列

$$A = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 3 \end{pmatrix}$$

について考えてみます。 A の固有多項式は

$$\Phi_A(\lambda) = \begin{vmatrix} \lambda - 1 & 1 \\ -1 & \lambda - 3 \end{vmatrix} = (\lambda - 2)^2$$

と $\lambda = 2$ を重根として持ちます。まず

$$A - 2I = \begin{pmatrix} -1 & -1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix}$$

に対して $(A - 2I)\vec{p}_1 \neq \vec{0}$ であるベクトル \vec{p}_1 を求めます。例えば

$$\vec{p}_1 = \vec{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

と定めると

$$\vec{p}_2 = (A - 2I)\vec{p}_1 = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

となります。このとき $(A - 2I)^2 = O_2$ が Cayley-Hamilton の定理から従い、

$$(A - 2I)\vec{p}_2 = (A - 2I)^2\vec{p}_1 = O_2\vec{p}_1 = \vec{0} \quad \text{i.e.} \quad A\vec{p}_2 = 2\vec{p}_2$$

を得ます。以上から

$$A\vec{p}_1 = 2\vec{p}_1 + \vec{p}_2, \quad A\vec{p}_2 = 2\vec{p}_2$$

を得ますが、これを $P = (\vec{p}_1 \ \vec{p}_2)$ を用いて行列で表現すると

$$AP = P \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$$

となります。さらに行列 $P = (\vec{p}_1 \ \vec{p}_2)$ は正則であることが分かります。実際

$$c_1\vec{p}_1 + c_2\vec{p}_2 = \vec{0} \tag{6.23}$$

から $c_1 = c_2 = 0$ を示すことができます。(6.23) の両辺に $(A - 2I_2)$ をかけると

$$c_1\vec{p}_2 = \vec{0}$$

となります。 $\vec{p}_2 \neq \vec{0}$ から $c_1 = 0$ が従います (演習 6.1, 167 ページ)。これを (6.23) に代入すると

$$c_2\vec{p}_2 = \vec{0}$$

を経て、 $c_1 = 0$ を得ます。以上で

$$A = P \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 1 & 2 \end{pmatrix} P^{-1}$$

を得ます。

$$\begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}^n = \begin{pmatrix} 2^n & 0 \\ n2^{n-1} & 2^n \end{pmatrix}$$

を帰納的に示すことができますから

$$A^n = P \begin{pmatrix} 2^n & 0 \\ n2^{n-1} & 2^n \end{pmatrix} P^{-1}$$

を得ます。

一般に実 2 次正方行列 A の固有多項式 $\Phi_A(\lambda)$ が重根を持ち、 A が単位行列の定数倍でない場合は

$$A = P \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 1 & \alpha \end{pmatrix} P^{-1}$$

を満たす正則行列を上のように構成することができます。

演習 6.8. 以下の $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して *Jordan* 標準形を求めましょう。

$$(1) A = \begin{pmatrix} 7 & 4 \\ -1 & 3 \end{pmatrix} \quad (2) A = \begin{pmatrix} 5 & -1 \\ 9 & -1 \end{pmatrix} \quad (3) A = \begin{pmatrix} 3 & 2 \\ -2 & -1 \end{pmatrix}$$